



5 外海の出津集落

5. Shitsu Village in Sotome

「外海の出津集落」は、潜伏キリシタンが何を拝みながら信仰を实践したのかを示す4つの集落のうちの一つである。

禁教期の出津集落の潜伏キリシタンは、自分たちの信仰を隠しながらキリスト教由来の聖画像をひそかに拝み、教理書や教会暦をよりどころとすることによって信仰を实践した。

また、この地域から多くの潜伏キリシタンが五島列島などの離島部へと移住し、彼らの共同体が離島各地へと広がることになった。

解禁後、潜伏キリシタンは段階的にカトリックに復帰し、集落を望む高台に教会堂を建てたことにより、彼らの「潜伏」は終わりを迎えた。



写本、長崎歴史文化博物館所蔵



長崎市ド・ロ神父記念館所蔵

十五玄義図(左)は、潜伏期の指導者宅に伝来した聖画像である。原本は焼失し、写本が残る。無原罪の聖母のプラケット(大型メダイ)(右)は、16~17世紀にヨーロッパから出津集落に伝わったとされる。



解禁後、出津集落の潜伏キリシタンは順次カトリックへ復帰し、1882年、パリ外国宣教会の宣教師であったド・ロ神父によって集落を見下ろす高台に出津教会堂(写真中央)が建てられた。また、村民の貧しい生活を改善するために、教会堂に隣接して授産施設である出津救助院(写真下段)も建設された。